

くしまっ子☆

もう一度全国の舞台へ
最後の高校総体へ挑む

中学時代は弓道部でしたが、福島高校に入学して選んだ部活動はレスリング。県の強化指定を受け、チームを引っ張る存在として、日々練習に励んでいます。

試合には74キロ級で出場していますが、入部当時の体重は約60キロ。趣味の筋トレと練習で増量し、顧問の柴田先生と相談しながら、毎日階級を上げて挑んだ昨年11月の74キロ級まで階級を上げました。



02. 結城 隆登くん

福島高校3年生。高校からレスリングを始め、昨年の県高校新人大会では個人74キロ級、団体で優勝。3月に全国高校選抜大会、4月にはJOCジュニアオリンピックカップに出場。

県高校新人大会では、団体、個人で優勝し、2冠を達成。さらには、2つの九州大会に出場し、個人戦で準優勝するなど全国大会の切符を勝ち取ります。「1年生の頃はなかなか結果が出せなかつたが、2年生になつて少しずつ勝てるようになつてきた」と振り返ります。

しかし、3月の全国高校選抜大会、4月のJOCジュニアオリンピックカップでは、両大会ともに一回戦敗退。「全国レベルの高さを痛感したと悔しさを感じます」。

次回、全国でのリベンジの機会はインターハイ。そのためには県高校総体を勝ち抜かなくてはなりません。「団体戦当日は、柴田先生の誕生日なので優勝旗をプレゼントできるように絶対勝ちます。そしてもう一度、全国に挑戦したい」。人一倍練習に打ち込んできた主将が、恩師へ勝利をささげ、再び全国への扉をこじ開けます。



畜産業に欠かせない職人 牛削蹄師

牛の健康は足元から

こうしたリスクを回避するために、伸びたひづめを削るのが牛削蹄師の仕事なのです。鈴木さんが、牛削蹄師として働き始めたのは34歳の頃。奥さんの叔父が牛削蹄師をしていたのがきっかけでした。「農業大学校で畜産を勉強していたので、いかは牛に携わる仕事をしたいと思っていました」と当時を振り返ります。

そこから叔父の下で技術を学びながらキャリアをスタートさせました。生産農家との信頼関係の上に成り立つこの仕事で、今では年間、延べ1000頭以上の削蹄を担っています。

牛の削蹄は、通常年に2回ほど。蹄師という仕事を、約20年にわたって続けているのが鈴木勝司さん。昨年11月に開催された全国牛削蹄競技大会に、九州代表として出場しました。

牛にとって、第二の心臓とも呼ばれ、健康に成長するうえで極めて重要なのがひづめ。そのひづめ自体が、歩くたびに伸縮を繰り返してポンプの役割を果たし、血液循環を促進します。ひづめが伸びすぎたり変形すると、血液を送るポンプ作用が低下したり、正しい姿勢がとれず歩き方が乱れるため、体全体の健康に影響を及ぼします。

全国でも有数の畜産王国である富崎。その畜産業を支える大事な職業が、牛のひづめを削り、形を整える牛削蹄師です。一般的にあまり知られていないこの牛削蹄師という仕事を、約20年にわたって続けているのが鈴木勝司さん。

昨年11月に開催された全国牛削蹄競技大会に、九州代表として出場しました。

牛の削蹄は、通常年に2回ほど。蹄師や剪定バサミ、やすりなどを駆使しながら、ひづめを整えて超えて、その巨体を制御しながらの作業は、常に危険とも隣り合います。

大きい牛ともなると500キロを越え、その巨体を制御しながらの作業は、常に危険とも隣り合います。

牛の性格やひづめの特徴を捉えながら、できるだけ短時間で正確に仕上げることが求められる。そのためには、集中力が重要」といいます。

現在市内に牛削蹄師は5人いま

すが、そのうち30代は1人で50代以上が4人と、深刻な後継者不足になっています。

この問題は、生産農家や他の農業分野でも同じです。「畜産業には若い世代が少ないですが、少しでも興味を持つてもらい、その中で牛のため、そして生産農家のための進歩を目指すことが大事だといふ鈴木さん。「自分の技術の進歩が牛のため、そして生産農家のためになる」。その思いでこれからも技術を磨き続けます。

鈴木 勝司さん
(福島地区・笠紙)

34歳で脱サラし、牛削蹄師になる。1級認定牛削蹄師の資格を持つ。昨年開催された全国牛削蹄競技会に九州代表として出場した。



削蹄に使用する主な道具



削蹄でひづめを削ります

串間のあんな人こんな人
People
ピープル

串間で活躍する人を紹介します
さらめき図鑑
kirameki

地域おこし協力隊 活動日記

vol.2

漁港に行きました！



現在、都井の恋ヶ浦に住んでいるのですが、先日、ご近所の宮ノ浦の漁港にお邪魔してきました。

漁師さんたちの朝はとても早い！早朝3時ごろから準備が始まり、30分後には出港します。当日はたくさんかかりませんでしたが、ブリが2400本かかることがあるとか。夜明け前から大仕事です。

漁師歴37年、宮ノ浦の井手清光さんにお話を伺うと、「漁業というのは生態系の異変に敏感な仕事で、山の状態によって魚が取れなくなってしまうこともしばしば」とのこと。

昔に比べて、鉄分の多いどんぐりの木などが少くなり杉が増えたため、山水の中に鉄分が含まれなくなり、海の生物の産卵場所・

海藻が育たなくなっているそうです。かといって、今から伐採したところで次は山肌が光を反射し、魚が寄り付かなくなってしまうとか。漁業って海の仕事なのに自然全体の影響をもろに受けてしまうシビアな一面があるんですね。

話を伺った井手さんは、この宮ノ浦が大好きだと話されていました。大好きなところで生活してるって言える人ってなかなかいないですよ。「仕事をあるから」と言ってしまいがち。本当に見習おうと思いました。

